

Ⅲ. 特 別 講 演

『わが国における乳房温率療法の治療成績』

大阪府立成人病センター診療局長

小 山 博 記 先生

第17回新潟乳癌研究会

日 時 平成 8 年 7 月 27 日 (土)

午後 2 時～

会 場 有壬記念館

2 F 大会議室

I. 一 般 演 題

1) 新潟県の乳癌集団検診の評価

姉崎 静記 (新潟県村上保健所)

昭和63年より始まった新潟県の乳癌集団検診の7年間の成績について検討した。

検診市町村数が増加するにつれて、発見乳癌数も増加しており、その半分は早期乳癌であった。

新潟県内でも、地域によって検診受診率のバラツキが著明であり、市部は郡部に較べて乳癌発見率が高かった。

検診方式別では、施設検診での乳癌発見率は、出張方式に較べて明らかに高率であった。

乳癌は都会型の癌であることから、今後の乳癌集団検診は、市部での施設検診の推進、拡大が必要である。

現在の一次検診は、視・触診で行われているので、本来の意味での早期乳癌の発見は不可能である。

このためには、一次検診への画像診断の導入が待たれる。

今回の報告は老健法の資料であるが、職域検診との連携も検討しなければならない。

Ⅱ. 主 題 画像診断と病理をめぐって

1) マンモグラフィによる乳癌の診断

小林 晋一・清水 克英 (新潟県立がんセン)  
椎名 真・笹本 龍太 (ター放射線科)  
佐野 宗明・牧野 春彦 (同 外科)

1993年に施行した1,864例のMMGを検討し乳癌診断の問題点を検討した。

1. TP 119例, FN 43例, TN 1,635例, FP 58例。

MMGによる乳癌のSensitivity 73.5%, FN rate は26.5%であった。

2. MMGの乳癌のSensitivityは50歳未満で58%, 50歳以上で83%であった。

3. 乳癌の診断精度を左右する最も重要な因子は乳房の濃度であった。これは、50歳を越えると濃度低下が著しい。

4. FNの原因は画像上描出できないもの32例(乳癌例の19.8%, 32/162), 見落とし6例, 良性疾患と誤診したもの5例であった。

2) 乳癌の超音波診断

—組織型による特性と誤診例の検討—

横森 忠紘・家里 裕  
山田 保・小林 功 (小千谷総合病院)  
落合 亮・坂元 一郎 (外科)

最近12年間に216例の乳癌に超音波検査を施行して次の知見を得た。

1) 乳癌に特徴的なエコー所見とその頻度は、①形態不整(91%)②境界悪性量(76%)③不整内部像(71%)④後方像減衰(38%)である。2)腫瘍径別(2cm以下と以上)による出現率は不整内部像(2cm以上が高頻度)を除いて大差なかった。3)組織型別に悪性所見の頻度を比較すると、形態不整と境界悪性量は全ての癌に共通し、不整内部像は乳頭腺管癌と充実性管癌に多く、後方像減衰は硬癌に特徴的であった。4)誤診例を検討すると、非浸潤癌は腫瘤像の描出が診断のカギであり、粘液癌は内部像のIrregularityが診断の決め手である。5)超音波診断の正診率は92%(2cm以下83%, 2cm以上98%)である。6)超音波検査による触診診断の補正率は、9%(2cm以下20%, 2cm以上3%)である。